

2025/1/30

リトルハウス通信

先日、友人から「しんどいからおもしろいねん」（野々村光子著）という本をプレゼントして頂きました。今回のリトルハウス通信では、この本を読んで感じたことをツラツラ書いてみたいと思います。滋賀県の障害者就労支援センターの職員である筆者が、それぞれに生きづらさを抱えた当事者たちと交流する様子がエッセイ形式で描かれています。

著書の活動の面白いところは、「当事者の営み」の中に入り、その営みを共有してしまうところにあります。即ち当事者が生きている「環境」を理解し、共感を寄せている様子が伺えるのです。その当事者が「おかれている環境」あるいは「自分で作り上げた環境」というものを筆者が「どんどん受容していく」展開が非常に独創的です。

この本に登場する当事者の方々はとにかく個性的で、独特なこだわりや嗜好が反映された環境で暮らしています。

例えば「目の下クマのべっぴんさん」という項があるのです。ここで描かれている当事者の「独特すぎる暮らし」の中で、当事者から発信されるメッセージ『「なんか、うまいこといかへん…」をゆっくりゆっくり一緒に見つけて行くこと』にまずは照準を定め、そのうえで「暮らしに触れさせてもらう」（野々村 2024：21）気持ちで、当事者の環境の中で入っていくわけです。

わたしが本項を読むと、「当事者の環境に入る」という言葉では足りず、「当事者の環境に浸かる」と言った方が適切だとすら感じます。その結果、当事者の『「おはよう」から「おやすみ」までをやる』（野々村 2024：21）ことになるわけです。

筆者は当事者の抱えている「生きづらさを解消する具体的な方策」を理詰めで行うようなことは一切しません。とにかく筆者は、当事者の生きている環境と一緒に付きながら、その環境のあちこちに關心を寄せ、はたまた個性的過ぎる当事者たちが持っている「人間としてのカッコよさ」を発見したりするのです。

福祉領域における支援において、支援者と当事者とのラポール形成の重要性が謳われます。本書を読んでも筆者と当事者との間にラポールが形成されている様子が手に取るように伝わるのですが、本書で示されているのは、支援技術としてのラポール形成ではまるでありません。筆者が行っているのは、ありとあらゆる人間の営みに対し、賛歌を送り続ける行為であり、その行為の結果として「信頼関係が紡ぎ出される」というように感じてなりませんでした。ソーシャルワークの原点が垣間見れるような本だと思います。是非ご一読をおススメ致します。

（鈴木）

■引用文献

野々村光子（2024）しんどいからおもしろいねん コトノネ生活 21